

1 代入可能性が崩れるとき (§15.2)

- 第 12 章で、指示的に不透明な (referentially opaque) 文脈では、
 - 一見すると構成性の原理が成り立たない
 - 同一指示の別表現での置き換えが、文の真理値に影響を与える
 - 非指示的な (= 外延を欠く) 表現を含むにもかかわらず、文が真理値を持つ
 - デレ・デディクトの曖昧性が生じる
 ことを見た。
- フレーゲは、そのような文脈では外延 (denotation) でなく、意義 (sense) が関与するとして、構成性の原理を維持した。
- 意義は内包 (intension) とも呼ばれる。
- 指示的に不透明な文脈は、内包的文脈 (intensional context) とも呼ばれる。
- (1) により、(2a) と (2b) の真理値は同じはず。だが、実際には、(1a) は真だが (1b) は偽ということが十分あり得る。
- (2)–(3) の真理値 (= 外延) は、命題的態度を表す動詞「知っている」、「信じている」の補部が表す命題 (= 意義) についてマリアムが知識/信念を有するか否かにより決まる。

(1) [[明石家さんま]] = [[杉本高文]]

(2) a. マリアムは [その番組の司会者が明石家さんまだ] と知っている。

b. マリアムは [その番組の司会者が杉本高文だ] と知っている。

(3) マリアムは [チョムスキーがノーベル言語学賞を取った] と信じている。

— ノーベル言語学賞は存在しない。そのため、「ノーベル言語学賞」は外延を持たない。

- デディクトの解釈は表現の意義に対応する。
- (4b) の「学長」は、4 月の時点で外延を特定することを可能にさせる「学長である」という意義を表す。

(4) a. 私は 4 月に学長にインタビューするつもりだ。その頃には学長は定年退職なさっているので、時間に余裕があるはずだ。 (デレ)

b. 私は 4 月に学長にインタビューするつもりだ。ただ、新しい学長はまだ決まっていないので、予定が立てられずにいる。 (デディクト)

2 非交差的形容詞 (§15.3)

- 「チャライ」のような修飾語は、修飾する名詞句の外延との共通部分を考えることにより、「チャライ NP」の意味が構成的に得られる。

- このような修飾語は、**交差的** (intersective) であると言われる。

(5) 交差的形容詞

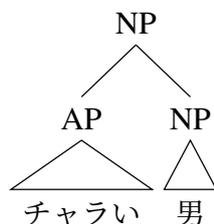
$$[[AP NP]] = [[AP]] \cap [[NP]]$$

(6) ジョンはチャライ男だ。

⇒ ジョンはチャライ。

⇒ ジョンは男だ。

(7) a.



b. $[[チャライ]] \cap [[男]]$



- 交差的な修飾語の一部には、文脈による境界設定が関与する。

(8) ジョンは古い友人（の一人）だ。

⇒ ジョンは古い。

⇒ ジョンは友人として（の付き合い）は古い。

⇒ ジョンは友人（の一人）だ。

(9) 幼稚園児の幸子が小さなバナナを食べている。だが、幸子にとっては大きなバナナだ。

- 一部の修飾語では、それを含む表現の外延が共通部分ではない。
- このような修飾語は、**非交差的** (non-intersective) であると言われる。
- (10) では、同一指示の表現による置き換えが必ずしも成立しない。
- 従って、「上手な」のような修飾語は外延でなく、意義と結び付く。

(10) [文脈：(A 高校で) $[[英語の先生]] = [[英語の話し手]]$

佐藤先生は上手な英語の先生だ。

⇒ 佐藤先生は上手な英語の話し手だ。

- (10) では、 $[[上手な NP]] = [[上手な]] \cap [[NP]]$ は成り立たない。
- だが、 $[[上手な NP]] \subseteq [[NP]]$ は成り立つ。
- このような修飾語は、**細分化的** (subsective) であると言われ、内包的である。^{*1}
- 交差的な解釈と非交差的な解釈で曖昧になる場合もある。

^{*1} $A \cap N \subseteq N$ なので、交差的修飾語も細分化的である。

- (11) 恵子は繊細な画家だ。
- (i) 恵子は画家で、繊細だ。(性格が画風に反映されている。) (交差的解釈)
- (ii) 恵子は繊細に描く画家だ。(だが、普段の生活では実に大胆でいい加減だ。)
(非交差的解釈)

- (12) Floyd is an old friend.
- (i) Floyd is old and a friend. (交差的解釈)
- (ii) Floyd has been a friend for a long time. (非交差的解釈)

Q. 日本語では(12)のような曖昧性は普通、生じない。それはなぜか？自分の専攻語の相当表現ではどうか？

- 非交差的でも細分化的でもない、つまり**非細分化的** (non-subsective) な修飾語もある。
- 日本語の形容詞には、非細分化的なものはないとされる (Ohno 2014)。
- 「偽の」(fake) を含む句の外延は、修飾される名詞の外延との共通部分が空集合になる。
- このような修飾語は**欠性的** (privative) であると言われる。

- (13) 偽のブランド品
- a. $[[\text{偽のブランド品}] \not\subseteq [\text{ブランド品}]]$ (非細分化的)
- b. $[[\text{偽のブランド品}] \cap [\text{ブランド品}] = \emptyset]$ (非交差的)

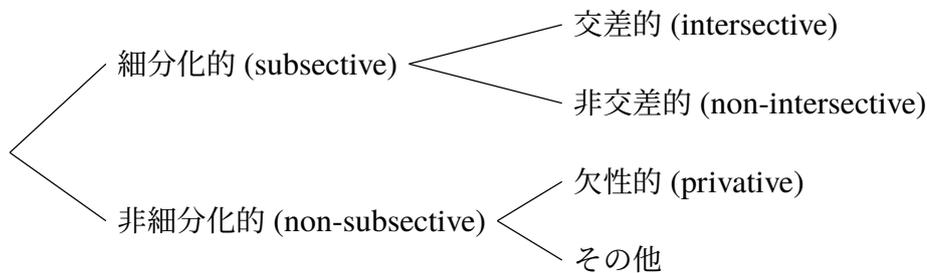
- (14) 欠性的な修飾語の例
- a. 架空の、想像上の、まがいの、過去の、前-、元-、非-
- b. counterfeit, spurious, imaginary, fictitious, fake, would-be, wannabe, past, fabricated, ex-, pseudo-, non-

- 「偽の X」は「人によっては X だと信じる」、「過去の X」は「過去の時点では X」のようなことであり、現在・現実の状況を超えた内包的な意味が関与する。
- 欠性的でない非細分的な修飾語もある。
- alleged/potential X は、現在・現実の状況では X であるかの判断が確定できないという点で、やはり内包的な意味が関与する。

- (15) alleged/potential terrorist 「テロリスト {とされる／の可能性のある} 人物」
→ テロリストかもしれないし、テロリストでないかもしれない

- 非交差的な修飾語（を含む表現）が交差的に解釈されることがある。
- それには、**強制** (coercion) という、意義を変更する意味操作が関与していると考えられる。

- (16) a. このブランドのバッグは、偽物（のブランド品）だ。
—偽物ならば、そもそもブランド品ではない。
- b. あり得ないことが起こった。
—あり得ないのなら、そもそも起こるはずがない。
- cf. チョコレートのウサギ（＝ウサギ型のチョコレート）
—「ウサギ」の意義は「ウサギの形をした物体」に変更されている
- (17) まとめ



3 その他の内包的文脈 (§15.4)

モダリティ (modality) *2

- モダリティを含む文の真理値は、それを含まない文の真理値だけからは予測できない。

- (18) (2006年の発話)
- a. バラック・オバマは米国史上初の黒人大統領だ。 (偽)
- b. ネルソン・マンデラは米国史上初の黒人大統領だ。 (偽)
- (19) (2006年の発話)
- a. バラック・オバマは米国史上初の黒人大統領になるかもしれない。 (真)
- b. ネルソン・マンデラは米国史上初の黒人大統領になるかもしれない。 (偽)

- 内包的文脈なので、同一指示の表現における置き換えのテストもうまく行かない。

- (20) 『米国史上初の黒人大統領』 = 『バラック・オバマ』
- a. ネルソン・マンデラは米国史上初の黒人大統領になっていたかもしれない。
- b. ネルソン・マンデラはバラック・オバマになっていたかもしれない。

時制 (tense)

- 「時制」は厳密には（主に）時間的位置 (temporal location) を表す形式のことだが*3、

*2 日本語の訳語としては「法性」が使われることがある。

*3 宗宮他 (2018) の時制の章を参照。

時間的位置の意味で使われることも多い。

- 過去や未来についての文の真理値は、現在時制のそれを含まない文の真理値だけからは予測できない。

- (21) a. 現在、日本の首都は東京だ。 (真)
 b. 千年前、日本の首都は東京だった。 (偽)
 c. 千年後、日本の首都は東京だ。 (?)

内包的動詞 (intensional verbs)

- 典型的には、搜索や願望を表す動詞。
- 内包的文脈なので、デディクトとデレの曖昧性が生じ(22)、外延を持たない表現を含んでいても真理値が決定できる(23)。

- (22) a. 私はあなたの着ている服が欲しい。
 b. 彼らは生まれたばかりの2匹の子犬を探している。
- (23) a. のぶ子は誕生日にどこでもドアを欲しがっている。
 b. 奏太は地図で多摩川線と山手線の乗換駅を探している。

4 内包性の標示としての接続法 (§15.5)

- ヨーロッパの言語を中心とし、内包性が**接続法**／**仮定法** (subjunctive mood) 使用の主要な決定要因となることが多い。
- ただし、接続法の使用環境は、すべての言語・変種で共通ではないことに注意。
- (24)–(25)では、**直説法** (indicative mood) と接続法の区別により、デレとデディクトの解釈が区別される。
- (25)では、願望を表す動詞の補文でも、接続法が用いられている。

- (24) スペイン語
- a. María busca a un profesor que enseñ-**a** griego.
 Maria looks.for to a professor who teaches-IND Greek
 ‘Maria is looking for a professor who teaches Greek.’ [デレ]
- b. María busca (a) un profesor que enseñ-**e** griego.
 Maria looks.for to a professor who teaches-SBJV Greek
 ‘Maria is looking for a professor who teaches Greek.’ [デディクト]

- (25) ギリシア語（小辞 na が接続法の標識）
- a. Theloume **na** proslavoume mia gramatea [pu gnorizi kala japonezika.]
 want.1PL SBJV hire.1PL a secretary REL know.3SG good Japanese
 ‘We want to hire a secretary that has good knowledge of Japanese.’ (Her name

is Jane Smith.) [デレ]

- b. Theloume **na** proslavoume mia gramatea [pu **na** gnorizi kala
want.1PL SBJV hire.1PL a secretary REL SBJV know.3SG good
japonezika.]
Japanese
‘We want to hire a secretary that has good knowledge of Japanese.’ (But it is
hard to find one, and we are not sure if we will be successful.) [デディクト]

5 ラムダ抽象よる関数の定義 (§15.6)

(ラムダ計算法の詳細は次回)

- 内包（意義）を**可能世界** (possible world) から外延への関数として理解する。
- 背景にある発想：
意義（内包）が分かれば、ある具体的な状況（可能世界）における外延が決定できる
→ 内包は、可能世界と外延を媒介する概念

(26) 「黄色い」の内包（集合バージョン）

$$\{\langle w, S \rangle \mid S = \{x \mid \text{可能世界 } w \text{ において } x \text{ は黄色い}\}\}$$

$$= \{\langle w, S \rangle \mid S = \{x \mid x \in \llbracket \text{YELLOW} \rrbracket \text{ in } w\}\}$$

(27) 「ベトナム語の N 先生」

$$\{\langle w, S \rangle \mid S = \{x \mid x \in \llbracket \text{ベトナム語の N 先生} \rrbracket \text{ in } w\}\} = \left\{ \begin{array}{l} \langle w_1, \{\text{野平}\} \rangle \\ \langle w_2, \{\text{野平, 根岸}\} \rangle \\ \langle w_3, \{\text{沼野}\} \rangle \\ \langle w_4, \emptyset \rangle \\ \dots \end{array} \right\}$$

- 内包的文脈においては、現時点の状況における外延でなく、それ以外の状況における外延も考慮に入れる必要がある。
- 状況は、時間や可能世界という点で、現時点の状況とは異なり、従って、外延も異なる可能性がある。

参考文献

- Ohno, Yutaka. 2014. Extensionality of Japanese adjectives. 『立命館言語文化研究』 25:245–257. URL http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/re/k-rsc/lcs/kiyou/pdf_25-3/RitsIILCS_25.3pp.245-257OHN0.pdf.
- 宗宮喜代子, 糸川健, 野元裕樹. 2018. 『動詞の「時制」がよくわかる英文法談義』. 大修館書店.